劉少奇と毛沢東（下）

――― 劉の対毛「独立性」に関する初歩的検討 ―――

ここでは、五五年の農業合作化と五八年の人民公社化を巡る両者の取り組みを中心に検討する。

四．農業合作化から人民公社へ

（一）農業合作化（五五年）

五五年前後の合作化に関する指導部の認識を考察するに際しては、「毛主席の認識上の変化は、五月に生じた」という薄一波の指摘が重要なヒントとなる(1)。

まず、五五年という年は、「胡風批判」で波乱の幕を開けるが、毛沢東は、批判の徹底化、批判対象の拡大を呼びかけ(2)、中国社会の左傾化の始まりを告げるとも言うべきこの政治運動において強力なリーダーシップを発揮している。さらに、毛は、高崗、饒漱石の粛清を決定した三月の党全国代表会議開幕式で、高・饒反党同盟の出現は、「わが国における現段階での激烈な階級闘争の一種の鋭い現れである」との厳しい認識を示した(3)。

五五年頃、農業合作化を巡る劉少奇自身の言動は、余り目だたなかったかの印象を受ける。それは、山西省での互助合作化に関する五一年の論争をきっかけに、この時期まで批判の矢面に立たされたことが一つの原因だったのかも知れない。薄によると、この時期の党内論争は、浙江省における農業生産合作社の整頓強化問題及び全国における農業合作化の発展速度に関し、毛沢東と中央農村工作部長の鄧子恢の間で行われた(4)。当時の劉少奇が依然として周恩来とともに「北京で中央の日常的業務を取り仕切っていた」(5)のであれば、合作化問題に関する彼の見解は、あるいは、同政策推進の実質的責任者であった鄧が代弁していたと言えるのかも知れない。ここでは、以上を前提として、毛の発言と鄧との発言を比較する中で、劉のスタンスを探ってみたい。

五五年上半期は、言うなれば鄧子恢の「独断場」だった。

一月四日、鄧は、党中央及び国務院に対し、合作社の発展計画に関する執行状況報告書を提出したが、彼は、その中で、県・区レベルの幹部は一年中穀物の統一買い付け統一販売等の経済面での仕事に忙しく、合作社の発展に費やす時間が少ないので、六〇万の合作社をうまく経営するという前年十二月の決定を実行するのは難しいという見解を示した。そして、全国共通の農業合作化に関する計画を定めること、合作化を発展から発展抑制、強化重視の段階に移すべきであることを提案した(6)。これに対し、党中央は鄧の提案を直ちに採用し、同一〇日、「農業生産合作社の整頓強化に関する中共中央の通知」を出した。同通知は、「強化する過程で引き続き発展」させることも求めているが、ポイントはあくまでも、「発展停止」「適当な縮小」にあり、河北、浙江、特に浙江省については、「社の整頓」と「合作社数及び社員戸数の必要かつ合理的な減少」が要求されたのである(7)。約二カ月後の三月に入ると、今度は、「中央農村工作部」名義で、「現有の合作社強化に関する通知」（二十二日）及び「浙江省における目下の合作化工作に対する意見（電報）」（二十五日）が出され、当初の計画達成も手伝い、発展停止の方針が一層明確に打ち出されるとともに、浙江省については、「圧縮実施」「互助組

或いは個人経営への回帰」が求められた(8)。そして、四月二十一日～五月七日、農村工作部は、「中央の委託を受けて」(9)、第三回農村工作会議を開催したが、五月六日、部長である鄧子恢は、総括報告の中で改めて、発展停止、生産重視、全力強化、適当な縮小、個人経営農家への配慮を訴えた(10)。

以上見てきたように、鄧の方針は、合作化の困難性を認識し、必要以上の発展を抑制、現有組織を強化して生産向上をはかるという性格のものだったと言えよう。

一方の毛沢東は、三月上旬、農村工作部に対し「停（止）、縮（小）、発（展）」の方針実施を指示しているが、これは一月の通知を補充するためのものであった(11)。更に、五月六日の鄧の総括発言によると、「元々我々は、今年（五五年）秋には（合作社の発展を）停止すると主張していたが、その後主席は、思い切って今停止させ、来年秋を過ぎたら再び検討する、つまりは一年半停止させようと言った」のである(12)。つまり、この時点において、鄧と毛の認識は基本的に一致していた、より正確に言えば、鄧は毛の考えに従って政策を執行していたと言えるのではなかろうか。

問題の五月、確かに毛の「反撃」が始まった。薄によると、そのきっかけは、四～五月に行った地方視察であったという(13)。

まず、五月五日、毛は、浙江省の合作化縮小問題で、「一九五三年に行った合作社大量解散の過ちを繰り返すな、さもなくばまた自己批判することになる」と鄧に警告した(14)。続いて九日、毛の「五七年までに四〇％合作化してはどうか」との問いに、鄧は、「前回三分の一と言ったのだから三分の一」と譲らず、毛は承諾せざるを得なかった(15)。そして十七日、杭州で自ら開催した、位置づけが極めて曖昧な「十五省・市党委員会書記会議」の席上、毛は、三月に述べた「停、縮、発」の方針を改めて主張したが、中心はあくまでも「発（展）」にあった(16)。これ以降、毛沢東は、鄧支持から鄧批判へはっきりと立場を変えたのであるが(17)、六月下旬、北京に戻った毛は、去る十四日に党中央政治局が新たに行った、五六年秋の収穫期までに合作社数を現在の六十五万から一〇〇万に増加するという決定にすら不満の意を表明、一三〇万まで増加させることを提案しているが、鄧は、またしてもこれを頑なに拒否した(18)。更に、七月十一日、毛は、合作化推進の実務者を前に改めて自己の見解を述べたが、鄧は自説を曲げなかったため、彼を厳しく非難し、「よちよち歩きの纏足女」の表現で有名な「農業合作化の問題について」の執筆に取りかかったのである(19)。この報告は、七月三十一日の「省・市・自治区党委員会書記会議」において発表されたが、毛は、この中で「先合作化、後機械化」の方針を明らかにするとともに、合作化のスピードアップを強く要求、続いて一〇月、党七期六中全会（拡大）の席上、中央農村工作部及び鄧子恢を名指し批判した。毛沢東によると、「一九五五年は、中国でまさに社会主義と資本主義とが勝敗を決する年であった。この決戦は、まず中国共産党中央が召集した五月、七月、一〇月の三回にわたる会議を経て表面化した。一九五五年の前半には、あれほど妖気が立ちこめ、暗雲に閉ざされていた」のである(20)。

ところで、「農業合作化の問題について」の中で、毛沢東は、浙江省が「断固として縮小する」という方針の下、一万五千の合作社を解散したことを指して、「中央の同意を経なかった」旨指摘している。しかし、中央農村工作部が浙江省党委員会農村工作部に宛てて前述の意見を出すに際し、原稿ができると鄧子恢は、副部長の陳伯達に対し毛沢東に見てもらうよう指示し、陳はそれを受け、「中央は同意した」旨、直ちに鄧に電話連絡したという(21)。それが本当だとすれば、毛のこの発言は、鄧の目には裏切り行為と映ったであろう。なお、「中央」或いは「党中央」と言う場合、新中国誕生直後から、毛沢東はこれを「毛沢東自身」と同義語と捉える傾向があったので(22)、毛のこうした権力志向にその他の指導者が細心の注意を払っていれば、五

〇年代中期以降の政治的悲劇は慎重に回避することができたのかも知れない(23)。また、「農業合作化の問題について」の報告が行われる前日にあたる七月三〇日、第一期全人代第二回会議は、第一次五カ年計画を採択し、五七年までに全農家数の三分の一の初級化を決定しているが(24)、毛がこうした「非常手段」に訴えざるを得なかった、そしてそれを許した政治環境並びに経済状況、そうまでして政策の修正を迫った毛沢東という人間像等については、別途検討する必要があろう(25)。

最後に、この時期における劉少奇のスタンスであるが、それは毛沢東の認識に変化が現れる五月以前の「既定の方針」に立っていたように思われる。例えば、四月十九日、劉は鄧子恢に対し、農村情勢を安定させるには合作社を一〇万減少させねばならない旨述べ(26)、翌二〇日、中央書記処会議で、農業集団化につき、「発展を停止し、全力をあげて強化する」ことが今後の総方針であると主張し(27)、更に、六月十四日には政治局会議を主宰するとともに、「合作社が一〇〇万になったら門を閉め、中農が自ら門を叩きに来るのを待つ」旨述べているのである(28)。但し、劉が「認識を新たにした」毛沢東に対し、鄧子恢同様の反抗を示した形跡はないように思われる。一〇月の七期六中全会で劉は自己批判したとの指摘もあるが(29)、仮にそうだとしても、同会議で批判の矢面に立たされたのはあくまでも鄧子恢であり、毛と鄧との間に挟まれて極めて不安定な立場にはあったであろうが、農業集団化を巡る劉への「総括」は、前年の時点（七期四中全会）で基本的には完了していたと考えるべきではなかろうか。六中全会の初日、劉は、「合作社への不満の声については、我々も当初から疑問視していたが、間もなく、毛主席は、この叫び声が真実でないことを発見するとともに、これを反駁し、中央農村工作部はデマを流していると叱責するに至った」と(30)、毛に同調する発言を行っているのである。劉は、鄧との間に、一線を画していたように思われる。

（二） 反右派闘争の衝撃（五七年前後）

「一九五五年第四四半期から、わが国には、目標数値を次から次へと高く掲げ、総合的なバランスを軽んじる冒進の傾向が現れ始めた。一九五六年の経済社会の発展を巡っては、冒進と反冒進という二つの異なる指導思想が実際には存在した」(31)が、「冒進」を代表する指導者こそ毛沢東であり、毛は経済省庁が彼の考えるところに基づき目標値を次々に上方修正したことに満足した(32)。五五年第四四半期から五六年初めにかけての時期が、「冒進」期とされる由縁である(33)。ところが、翌五六年に入ると、その他の指導者の口から急進化を戒める発言が相次いで表明される。その中心人物は周恩来であり(34)、陳雲、李富春、李先念、薄一波等の経済畑の指導者がこれをバックアップした。例えば、周は、二月八日に、右傾保守反対が主であるとしながらも、指導者の熱い頭には水をかけろ、そうすれば少しは冷めると毛沢東批判ともとれる発言を行い(35)、九月の第八回党大会では、バランスのとれた発展を求め、功を急ぐことを戒める発言を行っている(36)。毛沢東も十二月、当時増加の傾向を示しつつあった「地下工場」問題に関し、「社会的ニーズがあれば、地下工場は、今後も増えてかまわない」「資本主義が消滅した後、もう一度資本主義を行っても良い」と、イデオロギーよりも生産・生活をより重視するかの発言を行っているのである(37)。しかし、こうした「反冒進」に毛が本質的に不満であったことは、六月に中央宣伝部が『人民日報』社説として起草した「保守主義にも、急ぎすぎにも反対しよう」と題する原稿（二〇日掲載）に「（自分は）読まない」と書き、紙上に掲載されると、この論文の重点は反冒進にあり、「毛沢東を使って毛沢東に反対している」とみなしたこと(38)、十一月中旬に開催された党八期二中全会を「反冒進の集中的な現れ」と見なした

こと[39]、十二月、「皆は八全大会を支持するが、自分を支持しない」と不満を漏らしたこと[40]等から明かである。なお、八～九月にかけて、ソ連が急進的政策に反対する意向を表明したことは[41]、潜在的ソ連嫌いの毛を痛く刺激したと想像される。というのも、スターリン批判以降、毛沢東はソ連への懐疑心を一層強めており、中国は東方の国であると同時に大国であり、中国的特色を多く持つべきであると考えていたからである[42]。

一九五七年は、現代中国政治の一大転換点となった年である。スターリン批判（五六年二月）とポーランド・ハンガリー事件（同六月、一〇月）に如何に取り組むべきか、即ち、如何にして中国独自の道を歩むべきかに注意力を集中していた毛沢東は[43]、この年の夏、劇的演出で沈黙を破った。それは、六月に始まった「反右派闘争」と九月～一〇月にかけて開催された党八期三中全会（拡大）での「反冒進」批判の開始である[44]。

九月二〇日に開幕した三中全会は、「一九五六年から一九六七年までの全国農業発展綱領（修正草案）」（略称「農業四〇条」）を採択したが、農民による自力更正を呼びかけたこの「発展綱領」は、毛沢東の戦略を凝縮したもので、大躍進の事実上の発進命令とされる[45]。この会議最終日にあたる一〇月九日に総括報告を行った毛は、文革でも猛威を奮った「四大」（大いにものを言い、大いにぶちまけ、大々的に討論しあい、大字報を貼る）を五七年に生み出された最も革命的で、最も生き生きとした、そして最も民主的な大衆闘争のスタイルであると持ち上げ、「プロレタリアートとブルジョアジーの矛盾、社会主義の道と資本主義の道との矛盾が、疑いもなく、目下のわが国社会の主要矛盾である」と実質的に階級闘争の重要性を前面に打ちだした。即ち、生産力の発展こそが党及び政府の主たる任務であるとした、僅か一年前の第八回党大会路線を明確に否定する重大な認識変化を示したのである[46]。更に、毛は、五六年の冒進反対につき、「多く、速く、立派に、無駄なく」という社会主義建設の方針（五六年一月一日公表）、「農業発展綱領（草案）」（同年一月二十六日公表）を捨て去り、共産党的な「促進委員会」を捨て去ったと強く批判し、それらの復活を求めている[47]。この発言は、他の出席者にとって極めて唐突であったにも拘らず[48]、言うなれば、「腕力で」会議を乗り切って以降、毛は、「冒進的」リーダーシップを発揮し始め、まるで堰を切ったかのように、「三面紅旗」（社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社）へと突き進む[49]。ポイントとなる発言（メモ）及びその意義を以下に若干あげてみよう。

一．南寧会議（五八年一月）

（一）少数は多数に従うという党原則の否定（少数派の正当化）：「私は、一〇人の幹部のうちに、私を支持してくれるものが一人おればよいと考えた。（中略）地区委員会の副書記以上の一万人の人びとのうち、私を支持してくれるものが千人おればそれでよい」

（二）「冒進の貢献者」は、自分（毛）であるとの認識：「気持ちがたかぶってきたので、〔一九五六年四月〕三十四名の部長を集めて、十大関係について論じた。そこで、頭がボッとなり、「冒進」してしまった。（中略）私は三中全会で、昨年は三つの問題（多く・早く・立派に・無駄なく、四〇条綱領、促進委員会）が切り捨てられたと批判したが、誰も反対しなかったので、私は勝利して、また復活した」

（三）「積極的均衡論」の提起：「均衡は相対的、一時的、過渡的なものであり、不均衡こそが絶対である。（中略）均衡は革命的均衡、積極的均衡であり、消極的均衡、保守的均衡でない」[50]。

二．「工作方法六〇条」（草案）（五八年一月）

（一）「農業発展綱領」（四〇条）の繰り上げ達成要求：「今後、五年、或いは六年、或いは七年、或いは八年内に農業発展綱領四〇条の規定を完成させる」

（二）「不断革命」と「技術革命」（生産大躍進）の提起：「現在、技術革命がおとずれようとしており、十五年、或いはもう少し長い年月のうちに、イギリスに追いつき追い越す。（中略）われわれの革命は戦争と同じで、一つの戦争で勝利をおさめた後は、直ちに新しい任務を提起せねばならない」(51)。

三．春節の集い（五八年二月）

「土法高炉」の原型：「鉄鉱があり、石炭がありさえすれば、小型製鉄所を興してよい」(52)。

四．成都会議（五八年三月）

（一）「正しい個人崇拝」の必要性提起：「個人崇拝には二種類ある。一つは正しいもの、例えば、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンに対するもので、正しいものは、我々は崇拝、永遠に崇拝せねばならず、崇拝せねば大変なことになる。真理は彼らの手にあるというのに、どうして崇拝しないのか」

（二）文革期の紅衛兵に見られた「造反有理」的発想：「昔から、新しい思想、新しい学派をつくりだしてきたのは、いずれもみな学問の十分でない青年たちだった」

（三）「社会主義総路線」の定式化：「我々の今後の任務は、党中央と毛沢東同志の打ちだした、あらゆる積極的要素を動員し、人民内部の矛盾を正しく処理して、大いに頑張り、つとめて高い目標を目指し、多く、速く、立派に、無駄なく社会主義を建設するという総路線を貫徹し、技術革命と文化革命のために奮闘することである」(53)。

こうした経緯の後、八月、「農村に人民公社を設立する問題に関する中共中央の決議」が採択される。人民公社化突入をうたうバイブルとも言うべき同決議では、冒進期の頂点において採択されたこともあり、中国の将来像につき極めて楽観的見通しが立てられている。それは、「集団的所有制から全人民的所有制へ移行するのはひとつの過程であって、地方によっては比較的早く、三、四年で終わるところもあるが、地方によっては比較的遅く、五、六年あるいはもっと長い期間を要するところもある」「現段階でのわれわれの任務は、社会主義を建設することである。（中略）共産主義がわが国に実現するのも、もはや遠い将来のことではないように思われる」等の表現から伺われる(54)。

次に、劉少奇について見てみよう。五六年の劉は、毛沢東が問題視した六月二〇日付『人民日報』社説「保守主義にも、急ぎすぎにも反対しよう」の執筆から掲載決定にいたる過程で指導的役割を発揮し(55)、九月の八全大会で、「闘争の任務は、社会生産力の順調な発展を保護するということに既に変化した」と生産力重視を訴える政治報告を行い(56)、十一月、八期二中全会で、生活重視の発言を行ったこと(57)等から判断して、周恩来らと同様に、「反冒進」の側にあったと考えられる。

五七年の劉のスタンスは必ずしも明確でない。特に、六月から一〇月までのターニングポイントとなる時期における動向が伝わっていないことがそうした印象を強めるのかも知れない(58)。しかし、反右派闘争、八期三中全会をへ、特に、全国的水利建設運動の高揚により、大躍進、人民公社化が決定的になると、今度はあたかもその「旗振り役」を務めているかの印象を与える(59)。例えば、五七年十二月、全国労働者会議第八回全国代表大会祝辞で、「今後十五年間で、鉄鋼その他の重要な工業生産品の生産量でイギリスに追いつき、追い越そう」と発言し(60)、五八年になると、三月に開催された成都会議の席上、社会主義革命とその社会建設のいくつかの問題において、思想的に毛沢東についていけない所があったと自己批判し(61)、四月には、周恩来らと人民公社、ユートピア、共産主義につき「大きなこと」を言い(62)、六月には、全国婦女連合党組関係者に対し、農村で大いに公共食堂、託児所、養老院を建設すべき旨述べ(63)、七月

には、労働者に対し、（間もなく）共産主義を眼にすることができる旨述べる(64)等しているのである。特に、社会主義建設の総路線の方針を採択し、大躍進への突入を正式に宣言した五月の党八全大会第二回会議において、劉少奇は、党中央を代表して活動報告を行っているが、それは基本的に、「十大関係論」以降の毛の主張のコピーである。具体的には、（一）国内には二つの搾取階級がおり、過渡期の全体を通じ、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争、社会主義と資本主義との道との闘争が終始国内の主要矛盾であるとしたこと、（二）大衆の積極性を損なったと「反冒進」を総括（自己批判）していること、（三）不均衡を絶対視していることであり、さらには、「指導者毛沢東同志」個人を賞賛していることである(65)。

二年前の九月、第八回党大会（八全大会）政治報告の中で、嵐のような革命の時期は既に過ぎ去った、闘争の任務は、社会生産力の順調な発展を保証することに変わったと、今後の歩むべき穏健路線を声高々に歌いあげたのは、まさに劉少奇この人であった(66)。五六年の反冒進において、劉が毛沢東に対し「戦いを挑んでいたか」は定かではないが、周を中心とする幹部の動きに毛が不満を有していたことは明かである。八全大会の開催及び政治報告の作成に関し、毛は、自分が無視されたと「認識」したのである(67)。また、五七年夏から秋にかけての反右派闘争・反冒進批判期における「沈黙」と若干の時間をおいての大躍進、人民公社賞賛は、或いは、毛の変質に対する劉の苦悩或いは一種の恐怖を物語っているのかも知れない。同様に実務派官僚と言えようが、八期三中全会で政治報告を行い毛沢東への忠誠を示した鄧小平とも、逆に反右派闘争のさなかにあっても農業合作社における生産責任制に飽くまでも固執していた鄧子恢(68)とも異なる、劉少奇の人間像がここに浮き彫りにされる(69)。

五．調整から実権派批判へ

（一）人民公社の整頓（五八～五九年）

「一九五七年、毛沢東が反右派運動に注意力を注ぎ、階級闘争拡大化理論の萌芽を見せ始めていた頃、経済工作はまだその影響を受けなかった。（中略）一九五八年、毛沢東の注意力が経済建設に向けられると、階級闘争拡大化理論は経済建設に及び始めた」(70)。

五八年十一月から約半年間、共産党は、第一回鄭州会議（十一月二日～一〇日。一部中央指導者、大区責任者、省市委員会書記が参加）、武昌会議（十一月二十一日～二十七日。政治局拡大会議）、第八期六中全会（十一月二十八日～十二月一〇日）、第二回鄭州会議（五九年二月二十七日～三月五日。政治局拡大会議）、上海会議（三月二十五日～四月一日。政治局拡大会議）、八期七中全会（四月二日～五日）等一連の会議を開催し、人民公社問題の「整頓」を集中的に討論している。

ところで、これらの会議は、まさに人民公社の推進役であった毛沢東その人のイニシアティブで開催されたものであるが(71)、反右派闘争及び八期三中全会以降、階級矛盾を社会の主要矛盾と認識し、国全体を左旋回させていたにも拘らず、ただ単に「既に気づいていた誤りの是正に努めた」（傍線部筆者）と言うのみでは(72)、何故毛がこうした「正面的」努力を行ったのか疑問が残る。五九年三月一日、劉少奇、鄧小平らに宛てた手紙に毛自身が記したように、「（所有制等の問題に関する新たな見解は）一月及び二月の二カ月間で徐々に形成された。天津、済南、鄭州へ行き、三省の同志達と意見交換したことは、私にとって大きな啓発となった」こともあろう(73)。また、続く四月、浙江及び湖北の両関係者に啓発され、従来否定的であった「一平二調」（生産隊の土地等各財産及び労働力の強制徴用、並びにそれによる機械的平均化）は、

断固として改めねばならないと考えるようになった(74)。実際のところ毛は、第八期六中全会で「北戴河会議のときは熱心であったが、革命的情熱と実際的精神とを結びつけなかった」と、急進さを戒める自己批判的発言も行っている(75)。しかし、当時、毛沢東以下、「大躍進・人民公社そのものには何ら疑いが投げかけられず、指導思想上何らかの誤りがあるとは認識されなかった」のであり、特に、毛については、農村の窮状をある程度認識するに至った後も、大衆の情熱に水をかけるようなまねだけはしたくなかったのである(76)。そこで、毛沢東のメモ等を検討して分かるのは、「整頓」の重点があくまでも、人民公社という、当の農民及び現場指導者にとっても未だ茫漠として実体の把握できない農村の新組織形態に、より具体的な方向性を与えることと、毛の考える革命的なものの「継続性」を保つことにおかれていたということである。例えば、人民公社政策の継続性に関し、毛沢東は、次のように述べているのである。

・ 中央政治局の農村に人民公社を建設する問題についての八月決議のなかで、すでに明確につぎのように指摘した。人民公社が「集団的所有制から全人民的所有制へ移行するのはひとつの過程であって、地方によっては比較的早く、三、四年で終わるところもあるが、地方によっては比較的遅く、五、六年あるいはもっと長い期間を要するところもある」（八期六中全会において。傍線部筆者）(77)。

・ 公社に強力な経済力が備われば、完全な公社所有制が実現するし、進んで全人民的所有制も実現する。期間としては、おおよそ二つの五カ年計画が必要であり、急いではならない、せいては事をしそんじる。つまり、北戴河決議でも述べたように、三、四年、五、六年、或いはもっと長い期間が必要である。その後、いくつかの発展段階を経て、十五年、二十年、或いはもっと長い時間の後、社会主義の公社は共産主義の公社へと発展する（第二回鄭州会議において。傍線部筆者）(78)。

「頭は冷やさねばならないし、熱しなければならない、統一性の二つの対立面である」（五八年十二月一日）といった(79)、矛盾の止揚により新たな発展があるとする毛の哲学から判断して、彼にとり整頓は、むしろ「折り込みずみ」のものであり、決して後退ではなく、文字通り単なる「調整」に過ぎなかったのではないか。この点を認識したからこそ、また、反右派闘争という良き前例を見てきたからこそ、陳雲は、あくまでも慎重な姿勢を崩さず、軽率な発言を避けたのであり(80)、それとは逆に、毛沢東の真意を読み間違った彭徳懐は、「毛沢東の許容限度と範囲を超えて」大躍進と人民公社を批判したがために(81)、右傾機会主義の烙印を押されて失脚したのである。

一方の劉少奇は、五九年四月、前年十一月の武昌会議で打ち出された鉄鋼生産二〇〇〇万トンの目標達成は困難であり、一八〇〇万トンを目指すべきである旨、また、続く五月には、目標が高すぎて達成できないとかえってがっかりする旨、それぞれ毛沢東同様、「整頓」を擁護する発言を行っている(82)。また、本来なら左傾を一層ただし、五九年の大躍進をかち取るため全党を動員することを目的としながら(83)、彭徳懐の毛沢東宛て書簡をきっかけに、毛の主導による「彭集団」批判へと転じ、彼らを失脚へと追いやる場と化した五九年夏の廬山会議で、毛の彭非難演説及び非難決議に劉が同調したことも同様に、彼が決して一貫した反毛沢東主義者ではなかったことを示している。六二年一月に至るも、劉は、彭徳懐が毛沢東に宛てた「手紙で述べている具体的事情のうち、少なからぬものは事実に符合している」「いち政治局委員が中央主席に手紙を書き、たとえその手紙の中に正しくない意見があったとしても、誤りを犯したことにはならない」としながらも、彭は高崗・饒漱石反党集団の成員であった等四つの理由をあげ、闘争は必要であったと認識しているのである(84)。但し、廬山会議において、劉少奇が胡喬木に対し、毛演説後も引き続きそれ以前の方針で会議文書を書くよう指示したこと、並び

に会議終了後も、反右傾決議の通達範囲を省レベルまでに止めるよう指示したことは(85)、「調整」が方針としては間違っていなかっただけに、毛沢東の特異なリーダーシップに戸惑う劉の姿を示しているようにも思われる。

（二） 八期十中全会への道（六一～六二年）

廬山会議以降、約一年間にわたり展開された反右傾闘争をへ、六〇年冬以降、特に、同年夏の北戴河での中央工作会議を受けて開催された翌六一年一月の八期九中全会における「調整、強化、充実、向上」という「八字方針」の決定以降の一時期は、しばしば、「経済調整期」と位置づけられるが、その推進者は、主として劉少奇、周恩来、陳雲、鄧小平らであった(86)。従ってこの時期、劉少奇は、調整擁護の発言（時としてそれは、痛烈な「大躍進」批判となる）を頻繁に行っている。それは、五八年末の八期六中全会において、党主席としての職務に専念するため国家主席立候補を辞退するという毛の申し出(87)に同意する決定を受け、翌年四月に開催された第二期全人代第一回会議で、劉が国家主席及び国防委員会主席に就任したことが一つのきっかけを与えているのかも知れない。以下の発言は、劉のそうした「自信」を表しているようにも思われる。「資本主義そのものが皆ダメだと思ってはならない、資本主義国家の工場管理には、いい点がある」（六〇年五月）(88)、「食堂の状況に関し、私も、以前は良く分からず、食堂には優越性があり、労働力を節約し、女性を解放できる等と言っていた。しかし、現場に下りて実際に見てみると、そういうことではなかった」（六一年四月、毛沢東に対して）(89)、「（数年来の失政の原因につき、天災三分、人災七分という湖南省農民の評価を引用しつつ、全国の）大部分の地方では、我々の工作中の欠点や誤りが（失敗の）主たる原因である」（六一年五月）(90)、「（五九年の右傾批判以降タブーとされていた工場長責任制に関し）党委員会書記による一人指導制も一種の偏向である。工場長責任制から党委員会書記による一人指導制に変わるのが良いのか、それとも逆に工場長責任制をやるのが良いのか。この問題に関しては、依然として思想的混乱があり、認識が一致していると思ってはならない」（六一年九月）(91)等の発言がそれである。

片や、毛沢東もこの時期、劉少奇と同じ傾向の発言を繰り返し行っているが、急進的傾向を改めようという自己批判的姿勢は、廬山会議前の時期と比較して強まっているように思われる。「一九五九年四月の上海会議で定めた（鉄鋼生産）一六五〇万トンの指標は、依然として非現実的なものであった」（六〇年六月）(92)、「彼（毛沢東）も以前間違いを犯したことがあるが、それは必ずや改めねばならない。例えば、その誤りの一つは、北戴河決議で、公社所有制の変更に必要とする時間をはやく定めすぎた点である」（六〇年十一月）(93)、「今考えると、社会主義建設はあれほど急ぐ必要もなかった」（六一年一月）(94)、「ここ数年の農村工作における誤りに関し、彼（鄧子恢）の責任はない。彼の多くの見解は正しいものである」（六一年三月）(95)、「廬山会議前、我々は、実際の状況をまだ比較的しっかり把握していたが、廬山会議後はよくわからなくなった。（中略）廬山会議の反右傾という風が、それまでやってきた反「左」を切り落としてしまった」（六一年三月）(96)、「客観的規律に背くと必ず罰を受けるが、我々は、確かに罰を受けた、最近三年、ひどい罰を受けた。土地が痩せ、人が痩せ、家畜が痩せたが、この「三痩」は、罰でなくて一体何であろう」（六一年五～六月）(97)、「過去曲がりくねった道を歩んで来たことについては、まず中央が責任を負わねばならない（六一年十二月）(98)。しかし、より重要なことは、総路線、大躍進、人民公社の大枠は依然として神聖不可侵であり、六一年十二月の時点においても、人民公社における基本的採算単位を生産隊に下げることにつ

き、「これは後退でなく、前進である」とみなしていたように(99)、毛沢東が一連の見直しを前進過程にあると捉えていたことである。毛にとっての自己批判とは、否定により一層の飛躍を求めるという意味において、あくまでも積極的なものであった。

一九六二年は、文化大革命との関連においてターニングポイントとなる年である。

一月十一日～二月七日にかけ、五八年以降の自力更正を主体とした党の活動を総括するため(100)に開催された党中央拡大工作会議（通称：七千人大会）は、自己批判の大会、民主の大会と言われる(101)。実際、毛は、「およそ中央の犯した誤りのうち、直接的なものはわたしの責任であり、間接的なものもわたしにはいちぶ責任がある」と述べている(102)。しかし、その一方で、毛沢東は、「社会主義の全段階をつうじて、階級と階級闘争が存在するのだ。こうした階級闘争は、長期にわたる、複雑なもので、ときには非常に激烈なものでさえある。われわれの独裁手段は弱めてはならず、なお強めるべきである」と社会主義における階級の存在と階級闘争の必要性を指摘しており(103)、さらには、「ここ数年の困難は、まさに我々が毛主席の指示、毛主席の警告、毛主席の思想に基づかなかったからである」「我々の仕事がうまくいっている時は、毛主席の思想が順調に貫徹されている時、毛主席の思想が干渉を受けていない時であることを私は深く感じとっている」という林彪の「おべっか」ともとれる発言を賞賛すらしていることは(104)、当時の毛の状況認識及び心理状態を知る上で注目に値しよう。多数による自己批判というものが、往々にして責任の所在を曖昧にしてしまうことを経験的に知っている我々としては、この大会が真に民主的であり、大躍進、人民公社化政策に対し納得いく総括ができたかを疑う十分な理由があるのである(105)。

一方、劉少奇は、「広く意見を聴取するため、政治局の討論を経ることなくして」、直接出席者に書面報告書を提出し、その後、二一人で構成される起草委員会を指導することで実質的に本会議のイニシアティブを握った(106)。劉は、会議開催中の一月二十七日に行った発言の中で、五八年以降は成績第一、誤り第二とは一応言うものの、三面紅旗につき、現在は取り消すことはできないが、五年、十年経った後、経験を総括し結論を出そうと将来的に見直しを行う姿勢を示し、さらに、天災三割、人災七割という湖南農民の言葉をかりて五八年以来の政策に対する従来の肯定的評価見直しを求める等、実質的な毛沢東批判を行っている。彼は、当時人民公社をやらなければ、少しはましだったかも知れないとも述べたという(107)。更に、七千人大会直後の二月二十一日から三日間、財政問題を巡って開催された政治局常務委員会拡大会議（通称：西楼会議）で劉は、「中央工作会議（七千人会議）は、困難な状況に対する分析が徹底していなかった」「今は回復期にあるが、一九四九年後の三年間と異なって正常な時期ではない、非常時的性格を帯びているので、平常の方法を用いることはできず、非常手段を用いて経済調整の措置を貫徹せねばならない」旨述べている(108)。続いて五月、同じく劉の主宰で開催された中央工作会議では、この年の経済調整につき幅広い討議が行われたが、席上、劉は、年初の七千人大会において最も困難な時期は過ぎ去ったと発言したことに関し、「都市及び工業分野では、最も困難な時期は未だ過ぎ去っていない」と一層厳しい認識を示すとともに、何年も「左」を行って来たので今後は「右」を行うとまで述べたのである。なお、毛沢東は、滞在地である杭州に結果報告に来た周恩来に対し、会議で討論された六二年の経済調整計画とその通達に関する党中央の指示に同意している。しかし、毛が地方視察中、各地の指導者から受けた報告は、今年の情勢は昨年より素晴らしいという、彼の琴線をくすぐるが、中央指導者の認識とは全く異なるものであった(109)。

七月二十五日～九月二十七日の約二カ月間、北戴河及び北京で開催された中央工作会議（七月二十五日～八月二十四日）、八期十中全会予備会議（八月二十六日～九月二十三日）及び本

会議（九月二十四日～二十七日）は、当初、責任制等の問題を巡り如何にして農業生産を回復させるかにつき議論を行うことが予定されていた。しかし、八月に入ると、毛沢東は、五七年の八期三中全会以降、しばしば言及してきた階級闘争の問題を改めてもちだしたため、会議の方向は大きく変わることとなった。つまり、毛は、社会主義と資本主義の闘争は、社会主義の全歴史を貫き、階級闘争は毎日語られねばならないという、所謂「継続革命論」を全面的に展開し、あわせて劉少奇、陳雲、周恩来、鄧子恢、彭徳懐らが経済政策を誤った、個人農家を復活させた、名誉回復を謀った等と批判することで(110)、調整政策の方向転換を迫ったのである。これに対し、劉は、階級闘争を強調することで経済工作をおろそかにしてはならない、経済工作を第一におかねばならない旨述べ、併せて会議結果を伝える範囲を限定することを主張、「各地、各部門は、工作を第一位に置き、工作と階級闘争を平行して行うべきで、階級闘争を突出させてはならない」という毛の発言を一応は引き出している(111)。この意味で本会議は、政治思想及び文化面では左傾化の発展に決定的影響を与える一方で、国民経済の回復と発展を促す上で一定の意義を持った(112)と言えよう。しかし、実際にはこれ以降、国家主席辞任以来、いわば第二線に退いていた毛沢東は、再び強力な指導力を発揮し始め（例えば、十一月に行われた中央農村工作部の解散）、圧倒的趨勢を以って階級闘争第一の社会的、政治的ムードを醸成していくのである。

ところで、先に記したように、年初の七千人大会頃から毛沢東の中には、所謂「左的」思考が頭をもたげ始めていたが、この夏の政治的大転換は、それにも拘らず、いかにも唐突に思われる。この半年間の毛沢東の思索状況及び現状認識に関し、薄一波は次のように述べている。

（一）階級と階級闘争の問題を再びもちだしたのは、六二年下半期になって、調整政策により経済情勢が好転しはじめたこと、年初以来、農業生産の回復及び国民経済の調整を巡り意見の分岐が存在していたこと、「ソ連修正主義」の出現による中ソ国境の緊張と台湾海峡情勢の緊張といった中国を巡る国際情勢の大きな変化等により、国内の一定範囲内での階級闘争がある面で激化したためである。（二）五八年以降、三年に及ぶ「大躍進」がもたらした困難な状況及び経済情勢に対する評価・認識には、党内に異なった見方が存在しており、「左」の思想を持つ人間は、困難は決して大きくなく、情勢は依然として良好と見なした。その代表が柯慶施であり、毛沢東は多くの場合、「左」の見方に比較的同情していた。（三）八期十中全会前後、西楼会議及び五月の中央工作会議が情勢と困難とに対し下した現実的評価を毛沢東は、「黒暗風」と見なした。（四）毛沢東は調整を行うことに同意したが、その前提は、五八年以来の路線、方針、政策の正当性を認めることであった。しかし、西楼会議と中央工作会議は、調整政策の徹底をはかるあまり、この前提に抵触したため、毛はこれに干渉した(113)。こうした背景の下、現状を悲観的に捉えすぎているという毛沢東の度重なる批判を受け、劉は、八月十一日、中央工作会議で、最も困難な時期はまだ過ぎ去っていないという認識の下、国民経済の大幅な調整をうたった五月の中央工作会議につき自己批判するが、それでも毛は、「困難だ、（前途は）暗いと、もう二年以上も言ってきた、（前途は）明るいと言うことは合法でなくなった」と不満を述べているのである(114)。

なお、八期十中全会では、「農村人民公社工作条例（農業六〇条）」（修正草案）が採択されているが、毛沢東のイニシアティブによりその起草作業が始められた六一年二月頃(115)から採択に至る約一年半は、農村政策を巡る指導者間、或いは中央と地方との間の、供給制、集団食堂、基本生産単位等の問題を巡る「せめぎあい」の時期でもあった。例えば、毛沢東によると、彼は六一年三月の広州会議の席上、基本生産単位を全国的に生産隊に下ろすことにつき出席者の同意を求めたが、結局採択されなかったのである(116)。ところが、それと丁度同じ頃、安徽省

で復活し始めた、農村政策の焦点の一つである農家請負制に関し、従来よりその「試験的実施」は支持する、或いは態度の明確化を避けてきた毛沢東は、六一年十二月、生産隊が最小の採算単位であり、これ以上後退することはできないと「思想上の変化」を起こした(117)。そして、約半年後の六二年七月上旬になると、鄧子恢らが農家請負制を主張したこと、劉少奇、陳雲、鄧小平らがそれに反対しなかったこと或いは賛成したことに不満を感じるようになり、劉に対しては自宅にまで呼んで、どうして請負制（包産到戸）に反対しなかったのかと詰問したのである(118)。更に、二カ月の会議開催中、毛沢東は、前年の発言から掌を返した如く、鄧子恢を「資本主義農業専門家」と批判し(119)、「農家請負制をやり、個人経営をやったため、半年で農村の階級分化が激しくなった」と述べるのであった(120)。こうした毛の「変わり身」に劉少奇は驚愕した。と言うのも、劉は、鄧子恢らが精力的に主張・実施する農家請負制を従来より支持してきたからである。例えば、六二年前半、彼は、「工業分野でも農業分野でも充分後退せねばならない、その中には農家請負制も含まれる」と述べ、請負制を後退と位置づけつつもその必要性を認め(121)、また、請負制支持の立場をとる秘書の田家英を毛沢東が名指し批判した際、劉は、党内では異なった意見も発表できるのだからとその場を取りなす発言すらしているのである(122)。そこで彼は、「自身の性格とその立場から、『包産到戸』支持より毛沢東の展開する『単幹風』批判擁護へと直ちに転向した」(123)。即ち、七月十八日、劉は、集団経済に対する信念が失われていると幹部批判、請負制批判を行い(124)、さらには、八期十中全会も終盤の九月二十六日、「困難を目にしてびっくり仰天し、社会主義の道を放棄して、後退、単幹を行う、これが鄧子恢同志の態度である」と痛烈な鄧子恢批判を展開するとともに、五月の中央工作会議では困難さを多く見積もりすぎたと実質的な自己批判を行ったのである(125)。

以上見てきたように、反右派闘争以降の約五年の間、二つの調整期はあったものの、毛沢東の現状認識は基本的に「左」であり、七千人大会前後からこれは激しさをワンランク増したと言える。特に、西楼会議及び五月の中央工作会議には強い不満を感じており、それが両会議の主宰者である劉少奇に対する反感へとつながったのかも知れない。また、農業以外にも様々な工作条例（或いは類似の文書）が出されることで新中国史の総括が行われ、それが調整政策推進の一種の裏付けとなったこと、「大躍進」以来の失脚幹部に対する名誉回復がなされたこと（彼らの多くは、「三面紅旗」政策に従順に従わなかったがために失脚した）、言論界に新たな潮流が生じ始めたこと等は(126)、同様に毛沢東に対し、劉、周恩来及びその他経済官僚を中心とする反毛「組織」の存在を実感させたのかも知れない(127)。

（三）二つの「十条」と「二十三条」（六三～六四年）

六三年以降、劉少奇の発言は、公表されているものが極端に少ない。本稿では、当時既に毛・劉「対立」が存在していたと主張される場合、しばしば引き合いに出される「前十条」と「後十条」を簡単に比較することで、両者の関係を探ってみる。

「目下の農村工作における若干の問題に関する決定（草案）」（通称：前十条）は、六三年五月、杭州滞在中の「毛沢東が一部の中央政治局委員と大区書記を集めて開催した小規模な会議」（劉少奇は、当時外遊中）で採択された(128)。前十条は、六三年春から約三年間展開された農村社会主義教育運動の第一の綱領とも言うべき性格のもので、「目下、中国社会には、重大で尖鋭な階級闘争の状況が現れている」という状況認識の下に起草されている。具体的には、八期十中全会の階級矛盾、階級闘争に関する論点に改めて触れ、（一）如何なる時も階級闘争、プロレタリアート独裁を忘れてはならないと階級闘争を強調し、一部の人民公社、生産隊の指

導権は、事実上覆された地主、富農の手に落ちているとしていること、（二）今回の社会主義教育運動は貧農下層中農に頼らねばならないとして、その組織化を求めていること、（三）幹部は集団生産労働に参加しないと修正主義に陥ると修正主義発生の危険性を指摘し、三月頃からクローズアップされてきた、後の「大寨に学べ」の原型とも言うべき、昔陽県幹部の労働参加を賞賛していること等である。「毛沢東同志の偉大な旗のもとに、全党の同志よ団結せよ」の一言で締めくくられていることが、この決定が毛沢東の意向を強く反映したことを窺わせる。本会議の前に前十条の起草作業を担当していた彭真によれば、「北戴河会議以来、主席の思想にはついて行けないと誰もが感じていた」ような状況にあったのである(129)。

一方、同年九月の中央工作会議において制定され（草案）、翌六四年九月に通達された「農村社会主義教育運動における若干の具体的問題に関する規定（修正草案）」（通称：後十条）は、主として劉少奇、鄧小平、彭真らが中心となり制定されたものである。後十条は、「決定」であった前十条とは異なる「規定」であり、前十条により実施が決まった運動の具体的ガイドラインを定めたという位置づけのものである。この規定は、階級（或いは階級闘争）に関する毛沢東の認識を基本的に踏襲しているが、実施において、問題は「基層」にあるとの認識のもと、上級機関から派遣された工作隊の役割を重視している点、生産を重視し農民が裕福になるのを勧めている点、農村社会主義教育運動の主たる闘争対象が資本主義と修正主義ではなく、その力点が資本主義と封建主義となっている点等に毛沢東とは違う劉少奇「色」を感じとることもできよう(130)。しかし、六二年以降、毛沢東の強力な指導の下、中国国内の政治情勢は明らかに新たな左傾化傾向を示しつつあったことを捉え、「党の指導を強化することによって大衆運動に枠をはめようとした」とするように(131)、劉が、いわば巻き返しのために、当初から後十条を前十条に対抗するものと明確に位置づけていたと結論付けるには、未だ十分な論拠がないように思われる。因みに、毛沢東と後十条制定との関わりにつき、「党内手続き」という点から考察すると、六三年九月の中央工作会議直後、毛は、全国で「二つの十条」を宣伝することに関する指示を自ら起草し、また翌六四年九月の修正草案通達に際しては、事前に目を通しているのである(132)。

ところで、後十条の制定に関し、薄一波は、六四年に入ると、劉少奇が農村に存在する問題を必要以上に深刻視し始めていたこと、特に、五～六月にかけて開催された中央工作会議以降、劉が省レベルまで「和平演変」が進行していると認識していたこと、地方幹部が「四清」（経理帳簿、在庫、財産、労働点数の点検整理）に反対するのは反党行為であり、それを破壊するのは反革命であると見なしていたこと等を指摘している。更に劉は、その夏の地方視察で、「四不清」の元である党中央を含めた上部の「根っこ」を追求することを求め、各級政権の三分の一は自分らの手にないことを指摘するとともに、大衆の一層の動員、「四清」範囲の拡大及び大量の工作隊員投入による殲滅戦の展開を強調したのである。一方の毛沢東も、実は、（一）六四年三～四月の地方視察で、指導的幹部は農村の現場に入り二つの十条を宣伝すべきことを一再ならず求め、（二）六月の中央工作会議では、国家権力の三分の一は我々の手中にない旨述べ、わが国に修正主義が生じたらどうするかとの問題を提起し、（三）八月十六日の工作隊派遣方針に関する劉少奇の手紙に「完全なる賛成」の意を示し、（四）同二十七日には、王光美のいわゆる「桃園経験」を全国に紹介することを求める劉少奇及び陳伯達の見解に同意しているのである。つまり、薄の記述によれば、農村社会主義教育運動の急進化という点で、毛と劉は同罪なのである(133)。但し、毛沢東は、六三年九月当時より、後十条の制定、特に、「中央」名義で制定されたことを非常に不満に思っており、六四年八月には、「基層」幹部を全面否定してはならない、大量の工作隊員を一点に集中してはならない旨意見を述べていたという指摘

もあるので(134)、毛と後十条との関わりは、一層掘り下げて検討する必要があろう。いずれにせよ、こうした左傾思想の影響を受けて作業が行われたためであろう、「修正草案」は、社会主義教育運動の期間を従来の二～三年から五～六年へと延長し、また、実際の運動過程においても、基盤組織及び幹部への不信感を基に、「上部から派遣された」工作隊の重要性を強調したがために、不必要な奪権闘争が繰り広げられることになった。

さて、六三年後半以降、毛の批判対象は、文芸界、調整期の農村政策へとエスカレートしていったが(135)、こうした毛の左傾化に呼応するかのように、六四年二月一〇日付の『人民日報』は、刻苦奮闘、自力更正でその後一世を風靡した「大寨大隊」を初めて大々的に紹介し、林彪指導下にある解放軍も、五月より、『毛沢東語録』の学習を始めるのであった。この過程で、六二年以来、階級矛盾（闘争）問題の研究に注意力を集中していた毛沢東は、十二月になると、「官僚主義者階級」「資本主義の道を歩む指導者」という新たなる概念を使い、この階級は、労働者の血を吸うブルジョア階級分子に既に変わったか、変わりつつあり、闘争の対象であり、革命の対象であると認識するに至ったのである(136)。

十二月中旬から約一カ月間開催された全国工作会議が、毛沢東と劉少奇の関係を決定的に悪化させる場を提供することになった。

劉少奇の主宰で開催された会議の席上、毛沢東は、「四清」運動の性質につき、二つの階級間の闘争であると主張したが、劉は、「四清と四不清」の矛盾が主であり、人民内部の矛盾と敵対矛盾とが複雑に入り組んでいるため、矛盾は具体的に解決すべきである旨述べた。すると、毛沢東は、「劉は始皇帝である」と批判し、さらに党内には社会主義派と資本主義派がいると述べたのである。その討議結果は十七条にまとめられたが、それは毛沢東の考えを全面的に反映したもので、農村社会主義教育運動の性質は社会主義と資本主義間の矛盾であり、重点は資本主義の道を歩む実権派を粛清することであるとした(137)。

毛沢東は、それでも満足いかなかった。中央には独立王国と化している機関がある（鄧小平と中央書記処、李富春と国家計画委員会）と認識していた毛は、既に採択された十七条の修正を迫るとともに、劉少奇批判を一歩進めたのである。年が明けると毛は、文献を学ぶだけで農村に入らない、大衆に依拠せず自分達の人海戦術のみに頼っていると工作隊のやり方を批判し、長すぎて煩雑であると後十条を批判した。更には、「何が四清と四不清との矛盾、敵対矛盾と人民内部矛盾との交差だと言うのだ。どこにそんなに多くの交差があると言うのだ。内外の交差とは何か。これは一つの形式であり、性質的には反社会主義である。重点は、党内において資本主義の道を歩む実権派を粛清することにある」と、名指しではないものの、明らかに劉少奇を対象とした批判を展開したのである(138)。その結果が、十七条の修正という形で一月十四日に世に問われた、「農村社会主義教育運動に関し目下提起されているいくつかの問題」（通称：二十三条）である。「二十三条」は、まず、この規定が社会主義教育運動推進のための唯一の依拠すべき文書であるとした上で、今次運動の重点は、「舞台の表にも裏にもいる」党内の資本主義の道を歩む実権派を粛清することであると宣言し、都市と農村の社会主義教育運動の一体化による運動の昇華を求めるとともに（これ以降、「四清」は、政治、経済、組織、思想を清めることと新たに定義された）、「少数の者だけで活動してはならない」と工作隊のやり方を批判し、四つの民主（政治、生産、財務、軍事）実行に際し、人民解放軍に学ぶことを求めたのである。なお、大衆動員に関する、「纏足した女のように」ふらふらしてはならないとの記述は(139)、農業集団化を大いに促進させるきっかけとなった五五年七月当時の毛沢東の並々ならぬ意気込みを人々に強く思い起こさせたに違いない。この過程で、劉は、実権「派」というのは多すぎる、この表現に同意しない旨述べたが、この一言が、毛をしてついに劉少奇打倒を

決意させることになったのである(140)。

六．おわりに

本稿では、一九四〇年代初めからから六〇年代初めまでの約二十年間に発生したいくつかの重要な出来事を巡り、劉少奇 ― 毛沢東関係を簡単に眺めてきた。そして、以下の点を明らかにした。

第一に、劉少奇はある程度独立した思考の持ち主であったが、最終的には毛沢東に同調した点である。山西省の互助合作化、新民主主義の定義（或いは、国家の発展段階）、農業集団化、冒進と反冒進のいずれの問題においても、劉はその初期、自己の主張を明確に展開したが、それが毛の主張と衝突し、その矛盾が深刻化すると、自己批判する或いは沈黙する等して、毛沢東を支持してきた。毛の「無原則な」、或いは「唐突な」認識の変化（人によっては、これを「偉大な深化」と形容しよう）について行けず、戸惑う姿が浮かび上がる。しかし、反右派闘争がこうした図式に一定の修正を迫った。恐らく、この建国後最大の政治運動の衝撃によるのであろう、劉はこれを黙認し、翌年、大躍進・人民公社化を大いに支持した。これが第二の点である。そして第三に、劉少奇が国家主席に就任して以降、彼や周恩来、鄧小平、陳雲といった実務派官僚が中心となって推進した調整政策を毛沢東は、自分に対する挑戦と見なしたことである。文革期、毛沢東は、七千人大会以来の劉少奇との潜在的対立につき言及したという(141)。二十三条制定過程で、劉が毛の主張する階級闘争認識に同意せず、さらには、「実権派というグループ」が存在するという認識に反対したことは、対毛関係において劉がこれまで対立 ― 譲歩という行動パターンをとってきたことを見てきた毛にとり、我慢ならなかったのであろう。

では、劉少奇は、毛沢東に挑戦したが故に「当然」打倒されるべきであったのか。これまで見てきたように、毛、劉間には、かなりの期間にわたって、程度の差はあれ矛盾が存在していた。徳田教之氏は、「劉という毛にとって最も有力で緊密な同盟者となった人物との間にあった微妙なイデオロギー的差異」を生んだ原因を、劉が中国革命における労働者階級の指導的役割を一貫して重視していたのに対し、毛は農民を重視していた点、劉は一種の組織人であったのに対し、毛は超組織的な政治家であった点、大衆指導に関し、劉は指導の漸進性と柔軟性を強調したが、毛は柔軟と強硬の両路線を内包した指導理念を抱いていた点、さらには、劉の独立性（独立的思考）に求めている(142)。官僚主義、修正主義（特に、党内における）という問題を毛沢東が極めて重要視、深刻視していた点も指摘しておきたい。私見では、劉少奇が毛沢東の権威に挑戦を挑み、毛を最高指導者の地位から引きずり下ろそうとしたという明かな証拠はないように思われる。ただし、毛沢東は、六〇年代に入ると、党政府指導者の振るまい、社会全般に見られた調整の大きな流れを確かに、己に対する重大な挑戦と「認識した」のであり、こうした「状況証拠」は、確かにあったのである（例えば、毛沢東に報告しなくても他の指導者に報告すれば党中央に報告したことになるという一部幹部の認識、失脚幹部の名誉回復、「包産到戸」の推進等）。それが、国家指導者である劉少奇の打倒へとつながったと見るべきなのではなかろうか。毛沢東のそうした認識に気づかなかったところに、劉少奇の悲劇があったのである(143)。

なお、毛沢東 ― 劉少奇関係を考察するにあたっては、本稿では言及されなかった中国をとりまく国際情勢、特に、劉が「中国のフルシチョフ」とされて失脚した歴史に照らせば、一九五六年二月のスターリン批判以降の中ソ関係についても検討されねばなるまい。なんなれば、「中国をとり囲んだきびしい状況こそ毛沢東主義の生みの親」だからである(144)。ただ、さしあ

たりここで確実に言えるのは、毛沢東の個人史として中ソ関係を捉えた場合、毛が解放戦争・国共内戦当時からスターリンに対し憎悪とも言うべき感情を抱いていたこと、フルシチョフによるスターリン批判以降、彼のソ連に対する不信感が次第につのっていき、それが遂には修正主義批判へと発展したということだけである。劉少奇は、建国とともに中ソ友好協会総会会長に就任し、思想的にも確かに古典的マルクス主義者の色合いがより強かったと言えようが、それ以上にソ連との「結託」を示す証拠は恐らく、ないのである。

〈注〉

1 薄一波、『若干重大決策与事件的回顧』、三六八ページ。
2 『建国以来毛沢東文稿』第五冊、一九九一年、九ページ、一一二ページ。
3 同上、六一ページ。
4 薄一波、前掲書、三二七～三二八ページ。
5 浅沼かおり、『農業集団化政策決定までの政治過程（一九四九 ― 五五年）― 国家形成期の毛沢東 ―』、九七ページ。
6 薄一波、前掲書、三二八～三二九ページ。
7 『党的文献』一九八九年第一期、一九～二一ページ。薄一波、前掲書、三三〇ページ。
8 『党的文献』一九八九年第一期、二一～二三ページ。
9 薄一波、前掲書、三六八ページ。
10 「目前合作化運動状況的分析与今後的方針政策」『建国以来重要文献選編』第六冊、一八三～一九七ページ。
11 薄一波、前掲書、三六七ページ。
12 『建国以来重要文献選編』第六冊、一九一ページ。
13 薄一波、前掲書、三七一～三七二ページ。
14 同上、三三六ページ。五三年十一月四日、第三回農業互助合作会議の席上、毛沢東は、「成立の条件のある合作社を強制的に解散させるのは正しくない、何時行われようと誤りである」旨述べている。「関於農業互助合作的両次談話」『建国以来重要文献選編』第四冊、一九九三年、四七一ページ。
15 薄一波、前掲書、三六八ページ。
16 『建国以来重要文献選編』第六冊、二二四～二二五ページ。
17 薄一波、前掲書、三六九ページ。
18 廖盖隆主編『新中国編年史』、人民出版社、一九八九年、八六ページ。
19 薄一波、前掲書、三四二～三四五ページ。
20 「関於農業合作化問題」「《中国農村的社会主義高潮》的按語」『毛沢東選集』第五巻、一六八～一九一ページ及び二三三ページ。「在七届六中全会拡大会議上的総結」『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第一〇巻、中国研究資料中心、一一ページ。なお、徳田教之氏によると、毛の七月の演説は、「社会主義戦略としての毛沢東主義の出発点」であった（『毛沢東主義の政治力学』、一八九、一九八ページ）。
21 薄一波、前掲書、三三二～三三四ページ。庞松・林蘊暉、『毛沢東之路　立国興邦　一九四五 ― 一九五六年的毛沢東』、四〇五ページ。
22 『建国以来毛沢東文稿』によると、毛は建国直後から、「中央」及び「軍事委員会」名義で電報、コメントを出している。なお、李志綏によると、毛は、五六年当時、たとえ政治局の決定であっても、自分にはそれを変えることができる旨述べている。『毛沢東私

人医生』、台湾時報文化出版、一九九五年、一六九ページ。

23 ちなみに、一月一〇日の「農業生産合作社の整頓強化に関する中共中央の通知」は、劉少奇の決裁を得て出されている。薄一波、前掲書、三三〇ページ。

24 『建国以来重要文献選編』第六冊、四八三ページ。なお、三中全会直前の九月十四日に出された「農業合作社における生産管理工作をしっかり行うことに関する中共中央の指示」は、一般的に言えば、大型合作社は当時の低い生産条件を考えると適当ではないとして、その適度な小型化を求めている。

25 農業合作化を巡る毛沢東の「個人的指導」は八月以降も続く。例えば、八月二十六日、毛は、「省・市・自治区党委員会からの農業合作化に関する電報については、今後数カ月間は、（農村工作部でなく）中央が直接電報で返答する」旨コメントしているし（『建国以来毛沢東文稿』第五冊、三二四ページ）、一〇月四日から十一日まで開催された党七期六中全会（拡大）で、毛は、その締めくくりとして、「農業合作化を巡る論争と目下の階級闘争」と題する報告を行い、鄧の「誤り」を十三にまとめ、「右傾の誤り」「経験主義の誤り」と批判している（薄一波、前掲書、三四八ページ。『毛沢東選集』第五巻、一九五～二一七ページ。東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』（上）、三一書房、一九七六年、三一～四七ページ）。なお、薄一波は、毛沢東が合作化を急いだ原因として、食糧問題の早期解決という現実的課題があった点を指摘している。前掲書、三六三ページ。

26 中国農業経済学会等編『鄧子恢農業合作思想学術討論会論文集』、農業出版社、一九八九年、一九一ページ。

27 鄧子恢「在全国第三次農村工作会議上的開幕詞」『党史研究』一九八一年第一期、七ページ。

28 薄一波、前掲書、三四二ページ。

29 Roderick MacFarquhar, The Origins of the Caltural Revolution(1), Columbia University Press, 1974, p18～19.

30 薄一波、前掲書、三七二ページ。

31 同上、五二一ページ。

32 同上、五四二ページ。

33 同上、五二一～五六一ページ。

34 五八年一月上旬、杭州で開催された会議上、毛は、周恩来らを名指し批判したと言う。薄一波、前掲書、六三七ページ。

35 『周恩来選集』下巻、一九一ページ。

36 同上、二一一～二二八ページ。

37 『共和国走過的路 ― 建国以来重要文献専題選集（一九五三 ― 一九五六年）』、中共中央文献出版社、一九九二年、三〇八ページ。

38 薄一波、前掲書、五三八、六三八ページ。『毛沢東思想万歳』（上）、二〇七ページ。なお、毛沢東は、南寧会議開催中の五八年一月十五日、「自分を罵っているものをどうして読めよう」とも言ったという。呉冷西『憶毛主席 ― 我親身経歴的若干重大歴史事件片断』、新華出版社、一九九五年、五七ページ。

39 薄一波、前掲書、五五六ページ。五八年三月の成都会議スピーチ用レジュメに、毛沢東は、「恩来は五六年の二中全会報告で思い切って考えを述べた、（内容的には）間違っていたが、その（思い切ってものを言う）精神はくみとるべきである」旨記している。

40 『建国以来毛沢東文稿』第七冊、一一六ページ。
41 呂星闘主編、前掲書、四三六ページ。
42 薄一波、前掲書、五四四ページ。
43 『建国以来毛沢東文稿』第六冊、一四三ページ。
薄一波、前掲書、六三五ページ。例えば、五六年四月の講話「十大関係論」には、随所にソ連モデルを批判する表現が見られる。五八年三月、毛は、「十大関係論」に関し、「ここで、はじめて、自己の建設路線を提出した。原則はソ連と同じであったが、われわれ独自の内容がもられていた」と述べている。『毛沢東思想万歳』（上）、二二三ページ。
44 薄一波、前掲書、六三六ページ。薄によれば、これ以降の約半年間が「党内民主の不正常化の転機」となった。同上、六五三ページ。
45 宇野重昭 等『現代中国の歴史』、一五五ページ。
46 毛沢東のこうした認識変化（「敵・味方の範疇の曖昧化、敵の範疇拡大化」）は、六月の反右派闘争開始をきっかけに形成されていった。六月八日「組織力量反撃右派分子的猖狂進攻」、六月二十二日「不平常的春天」、七月「一九五七年夏季的形勢」。以上『建国以来重要文献選編』第一〇冊、『建国以来毛沢東文稿』第六冊。
47 「做革命的促進派」『建国以来重要文献選編』第一〇冊、五九七～六一二ページ。「在八届三中全会総結時的講話」『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第一〇巻、一八二ページ。
48 「労働者階級と資産階級との矛盾、社会主義と資本主義との矛盾は、全過渡期を通じての主要矛盾である」との毛の発言を「多くの同志は理解できなかった」。薄一波、前掲書、六二四ページ。
49 但し、五八年という年に大躍進を実施するという綿密な計画が毛沢東にあったようには思えない。農業四〇条の実施につき、毛は、五八年三月当時、五九年に大躍進すればよいと考えていたのである。『建国以来毛沢東文稿』第七冊、一一四ページ。
50 『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第二巻、四〇～四七ページ。『毛沢東思想万歳』（上）、一九八～二〇九ページ。鄭謙、韓鋼『毛沢東之路　晩年歳月　一九五六年后的毛沢東』、中国青年出版社、一九九三年、七七ページ。
51 『建国以来毛沢東文稿』第七冊、四八～四九、五一ページ。
52 薄一波、前掲書、七九六ページ。
53 『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第二巻、八二、九五ページ。薄一波、前掲書、六六三ページ。『建国以来毛沢東文稿』第七冊、一五七ページ。なお、会議上、柯慶施は、「我々は、迷信的と言われる程まで毛主席を迷信し、盲目的と言われる程まで主席に従わねばならない」と述べているが（廖盖隆主編『新中国編年史』、一三七ページ）、恐らく、こうした「貢献」によるのであろう、柯は、五月の八期五中全会で政治局委員に選出されている。
54 『建国以来重要文献選編』第十一冊、四四九～四五〇ページ。
55 薄一波、前掲書、五三四ページ。張秋雲・鄭淑蘭「一篇反冒進社論的由来」『党的文献』一九九〇年第二期、一一～一二ページ。
56 『劉少奇選集』下巻、二五三ページ。岡部達味氏は、この会議において「党内反対派」は、毛沢東の「過渡期の総路線」によって提起された新しい「革命成長転化・発展段階」モデルを形の上では受け入れつつも、実際上はできる限り自分達のオーソドックスな路線

が貫徹できるよう努力したと、対立的視点で捉えている。「中国の発展段階モデルと『近代化』政策」、一九三ページ。

57 五八年五月の八全大会第二回会議におけるスピーチメモによると、毛は、反冒進はこの会議において「突然爆発した」と認識していた。『建国以来毛沢東文稿』第七冊、二〇五ページ。

58 五七年の劉少奇の発言については、上半期のものがいくつか公表されているが、主要なものとして、四月の「如何正確処理人民内部矛盾」と五月の「関於高級党校学員整風問題的談話」と題する二つの報告がある。『建国以来重要文献選編』第一〇冊。

59 鄧小平によると、大躍進で毛沢東の頭が熱くなっていた時、「劉少奇同志、周恩来同志、そして私（鄧）は、誰も反対しなかった、陳雲同志は口を開かなかった」（中共中央文献編集委員会編『鄧小平文選』一九七五～一九八二年、人民出版社、一九八三年、二六〇ページ。

60 薄一波によると、これが大躍進、特に工業面での大躍進を発動する重要なスローガンとなる。但し、それより約一カ月前の十一月、毛は、国内でなくモスクワおいて、中国は十五年の時間をかけ、鉄鋼生産量の面でイギリスに追いつき追い越すという目標を明かにしている。『建国以来毛沢東文稿』第六冊、六三五ページ。

61 史唯「冒進・反冒進・反反冒進」『党的文献』一九九〇年第二期、一〇ページ。

62 薄一波、前掲書、七三一ページ。

63 同上、七三四ページ。

64 馬斉彬等編写、『中国共産党執政四十年』、中共党史資料出版社、一九八九年、一五〇ページ。

65 日本国際問題研究所中国部会編『新中国資料集成』第五巻、一九八一年、六四～九三ページ。

66 『劉少奇選集』下巻、二五三ページ。ただし、同報告は、劉本人が起草したのではないという。馬雲飛、「劉少奇与六十年代的国民経済調整」、八ページ。

67 李志綏、前掲書、一七三ページ。

68 「農村人民内部の矛盾およびその矛盾を正しく処理する方針と方法について」『新中国資料集成』第五巻、一九八一年、四六四～四九一ページ。

69 なお、「工作方法六〇条」（草案）の中で、「上部構造は、必ず経済的基礎と生産力発展の必要に適合しなければならない」とする第二十三条が劉少奇により起草された（『建国以来毛沢東文稿』第七冊、四六ページ）ことは興味深い。なんなれば、毛沢東にはむしろこれとは逆の発想が強いので、劉の抵抗によりこの条項が挿入されたと解釈することも可能だからである。ちなみに、小島朋之氏は、五八年当時、いくつかの具体的問題に関し、党内に微妙な見解の不統一があったことを指摘している（「一九五八年における中国共産党の政策決定過程」『現代中国と世界 ― その政治的展開』）。

70 鄭謙・韓鋼、前掲書、七六ページ。

71 薄一波、前掲書、八一七ページ。中共中央党校党史教研室資料組編写『中国共産党歴次重要会議集』、上海人民出版社、一一九～一三三ページ。

72 十一期六中全会「歴史決議」。

73 『建国以来毛沢東文稿』第八冊、八五ページ。

74 毛沢東「十年総結」『党的文献』一九九二年第三期、一六ページ。

75 『毛沢東思想万歳』上、三四九ページ。また、毛は、第一回鄭州会議において、「わが国

人民の直面する任務は、（中略）社会主義の集団的所有制を社会主義の全人民的所有制へ、不完全な社会主義の全人民的所有制を完全な社会主義の全人民的所有制へ徐々に移行させ、社会主義を築くことである」と述べ（『建国以来毛沢東文稿』第七冊、五〇四ページ）、「この決議（人民公社のいくつかの問題に関する決議）の主たる矛先は、性急なものにどう対応するかの点に向けられて」いたとも発言している（同上、三五五ページ。薄一波、前掲書、八一六ページ）。傍線部筆者。

76 薄一波、前掲書、八六六ページ。五九年二月、河南省では、毛沢東のことを「右傾である、後退している」と批判する見解が少なからずあったという。『建国以来毛沢東文稿』第八冊、八六ページ。

77 『中国大躍進政策の展開』上巻、三九三ページ。

78 『建国以来毛沢東文稿』第八冊、六九ページ。

79 「関於帝国主義和一切反動派是不是真老虎的問題」『建国以来毛沢東文稿』第七冊、六一二ページ。

80 薄一波、前掲書、八二八ページ。

81 同上、八六七ページ。

82 同上、八三二～八三三ページ。

83 同上、八四五ページ。

84 同上、一〇九〇～一〇九一ページ。

85 黄峥、『劉少奇一生』、三四三～三四四ページ。

86 十一期六中全会「歴史決議」。薄一波によると、「八字方針」の定着は、六二年二月の「西楼会議」を待たねばならなかった。前掲書、八九九ページ。

87 これ以前にも毛沢東は、国家主席の職から離れたい旨発言している。例えば、五七年五月の「一九五八年から暫くの間、この任務（国家主席）を離れ、精力を集中して重要問題の研究にあたらせて欲しい」との発言（『建国以来毛沢東文稿』第六冊、四五七～四六〇ページ）。なお、毛は、早くも五六年時点で次期国家主席にはならない旨発言していたという指摘もある。黄峥、前掲書、三三六ページ。また、党主席の地位についても毛は、五六年九月十三日、「私は既に決めている、つまり適当な時期がきたら主席を下りるということであり、（その時には）名誉主席に命じて欲しい」と述べており、その直後、必要な時には名誉主席を設けることができると規定した新党規約が採択された（毛沢東「関於中共中央副主席和総書記的問題」『党的文献』一九九一年第三期、九ページ）。

88 劉学琦編、『劉少奇風範詞典』、二〇一ページ。

89 薄一波、前掲書、九二六ページ。

90 『劉少奇選集』下巻、三三七ページ。

91 薄一波、前掲書、九八一ページ。

92 『党的文献』一九九二年第三期、一五ページ。

93 「中共中央関於転発《甘粛省委関於貫徹中央緊急指示信的第四次報告》的重要批示」『党的文献』一九九二年第三期、一七ページ。

94 薄一波、前掲書、八九四ページ。

95 同上、九一三ページ。

96 『党的文献』一九九二年第三期、一九ページ。

97 薄一波、前掲書、一〇一五ページ。毛は、また、この会議で廬山会議後誤って批判された者は皆名誉回復されねばならない旨述べている。『中国共産党歴次重要会議集』、一

五五ページ。
98 『党的文献』一九九二年第三期、二四ページ。
99 鄭謙・韓鋼、前掲書、一二九ページ。『中共党史重大事件述実』、一二五ページ。
100 「七千人集会での毛沢東講話」、土井章監修『現代中国革命重要資料集』第二巻、大東文化大学東洋研究所、一九八一年、七八三～七八四ページ。
101 薄一波、前掲書、一〇一四ページ。
102 土井章監修、前掲書、七七二ページ。馬斉彬等編写、前掲書、二一二ページ。
103 土井章監修、前掲書、七七四ページ。「在拡大的中央工作会議上的講話」『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第三巻、二八五ページ。
104 薄一波、前掲書、一〇四五～四六ページ。
105 毛沢東は、劉少奇の発言に階級的観点がない点が大いに不満であったという。李志綏、前掲書、三七二～三七三ページ。
106 『中国共産党歴次重要会議集』、一六七ページ。
107 薄一波、前掲書、一〇四六ページ。「在拡大的中央工作会議上的講話」『劉少奇選集』下巻。裴棣「六〇年代初党糾正〝左〟傾錯誤中的曲折」『党史研究』一九八五年第六期、四一ページ。なお、彭真に至っては、大会提出用の「書面報告」起草委員会において、「毛主席に何ら誤りがなかったわけでもない。三～五年で（共産主義に）移行するという方針、（公共）食堂を実施するという方針は、いずれも毛主席が批准したものである」と毛沢東を名指しで批判している。薄一波、前掲書、一〇二六ページ。
108 薄一波、前掲書、一〇五一～五二ページ。なお、劉、周恩来及び鄧小平は、会議終了後、その結果を毛沢東に報告するため武昌に行っている。
109 中央檔案館党史資料研究室「介紹一九六二年五月中央工作会議」『党史研究』一九八一年第四期。鄭謙・韓鋼、前掲書、一九六ページ。なお、鄧小平が「白猫（黄猫）黒猫」論を表明したのもこの時期に当たる。「怎様恢復農業生産」『鄧小平文選』（一九三八―一九六五年）、人民出版社、一九八九年、三〇五ページ。
110 「北戴河における中央工作会議での講話」「八期十中全会での講話」『毛沢東思想万歳』（下）。馬斉彬等編写、前掲書、二二一～二二二ページ。
111 「在中国共産党八届十中全会上的講話」『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第三巻、三一七ページ。薄一波、前掲書、一一〇三ページ。
112 張弓「党的八期十中全会評述」『党史研究』一九八四年第二期、一七ページ。
113 薄一波、前掲書、一〇七一～一〇七七、一一〇二ページ。
114 同上、一〇七四ページ。
115 同上、九一五ページ。
116 毛沢東「致中央常委及有関同志」『党的文献』一九九二年第三期、一八ページ。
117 薄一波、前掲書、一〇八〇ページ。
118 同上、一〇八六ページ。黄崢、前掲書、三八九ページ。
119 薄一波、前掲書、一〇八九ページ。
120 同上、一〇八七ページ。
121 呂廷煜、韓鶯紅『中華人民共和国歴史紀実　艱難探索（一九五六～一九五八）』、紅旗出版社、一九九四年、一六一ページ。
122 同上、一六六ページ。
123 同上、一六七ページ。

124 薄一波、前掲書、一〇八六ページ。
125 『中華人民共和国歴史紀実 艱難探索（一九五六～一九五八）』、一六七～一六八ページ。なお、当時の主要指導者の農家生産責任制に対するスタンスは、薄一波、前掲書、一〇七八～一〇九〇ページに詳しい。
126 『現代中国の歴史』、二〇二～二〇六ページ。幹部の名誉回復問題に関し、毛は、この決定の公布が党中央、即ち、毛沢東自身の事前同意を得なかった、中央組織部は独立王国化したと述べたという。実のところ、同部部長の安子文は、劉少奇、鄧小平、彭真に報告すれば、中央に報告したことになると認識していた。李志綏、前掲書、三七七～三七八ページ。
127 地方に委譲された権力・権限の中央への再集中は、調整期の重要な政策の一つであった。貨幣発行権の中央集中を呼びかけねばならないほど強力な力を持つに至った（張天栄「一九六二年召開的七千人大会」『党史研究』一九八一年第五期、二〇ページ）地方政府指導者にとって、調整政策は毛沢東同様、危機感を抱かせるものと捉えられていたと思われる。
128 馬斉彬等編写、前掲書、二三三ページ。薄一波、前掲書、一一〇八ページ。
129 「当面の農村工作の中でのいくつかの問題についての党中央の決定草案『前十条』」、土井章監修、前掲書。鄭謙・韓鋼、前掲書、二四四ページ。なお、この時期、毛沢東は、前十条関連の指示及び発言を行っているが、毛によると、今回の運動は、「土地改革以来、最初で最大の闘争」であった。「社会主義教育運動についての指示」「杭州会議での講話」『毛沢東思想万歳』（下）。
130 「農村社会主義教育運動中のいくつかの具体的政策についての党中央の決定草案」「農村社会主義教育運動中のいくつかの具体的政策についての党中央の決定修正草案『後十条』」、土井章監修、前掲書。文革の開始を告げる六六年八月の八期十一中全会での発言に見られるように、毛沢東は工作隊派遣を特に問題視していた。『中国共産党歴次重要会議集』、二二一～二二二ページ。
131 『現代中国の歴史』、二〇九ページ。
132 鄭謙・韓鋼、前掲書、二五八ページ。馬斉彬等編写、前掲書、二三九ページ。実際、六三年十一月以降、前十条及び後十条の宣伝工作が全国的規模で始まった。
133 後十条の制定過程については、薄一波、前掲書、一一一二～一一二七ページに詳しい。なお、政治学院中共党史教研室編『中国共産党六十年大事簡介』（中国人民解放軍国防大学出版社、一九八六年、五一七ページ）は、階級闘争を誇大視する傾向において、後十条の状況認識は前十条よりひどいとみなしている。
134 李志綏、前掲書、三八五ページ。鄭謙・韓鋼、前掲書、二六〇ページ。
135 例えば、十二月に書かれた「多くの共産党員は、封建主義・資本主義芸術の提唱には熱心だが、社会主義芸術の提唱には熱心でない」旨のコメント、翌年二月の「〝三百一包〟（自留地、自由市場、損益自己負担、家庭請負制）の目的は、社会主義の農村集団経済を解散し、社会主義制度を破壊するものである」との批判。廖盖隆主編、前掲書、二二二、二二七ページ。
136 薄一波、前掲書、一一二八～一一二九ページ。中共中央党史研究室編『中国共産党歴史大事記』、人民出版社、一九九一年、二六八ページ。
137 廖盖隆主編、前掲書、二三八ページ。薄一波、前掲書、一一二九ページ。「関於四清問題的討論（摘録）」『毛著未刊稿、《毛沢東思想万歳》別集及其他』第四巻、六九ペー

ジ。

138 薄一波、前掲書、一一三〇、一一三二ページ。

139 土井章監修、前掲書。

140 廖盖隆主編、前掲書、二三九ページ。毛沢東がエドガー・スノーに語ったところによると、劉は、党内実権派打倒の要求に対し、「懸命に反対した」。『革命、そして革命』、朝日新聞社、一九七二年、二七～二八ページ。

141 『中華人民挙和国歴史紀実　曲折発展（一九五八 ― 一九六五）』、一三七ページ。

142 徳田教之、前掲書、一二三～一二六ページ。

143 天児慧氏は、「毛沢東路線と劉少奇路線の相違・対立を当初からアプリオリなものと想定するのは、事実に反する」としている。『中国 ― 溶変する社会主義大国』、東京大学出版会、一九九二年、八〇～八一ページ。

144 毛里和子、『現代中国政治』、二一一ページ。